

「思い出のTシャツ」

神戸女学院高等学部1年

城口 悠美



「Tennis has no borders.」

私は、帰国前夜の歓送会で拙い英語ながら、一言ずつかみしめて、お礼の言葉を述べました。どうしても、自分の言葉で、直接思いを伝えたかったからです。

中学生の時、私は、兵庫県テニス協会の推薦を受けてジュニア代表チームの一員として、フィリピン遠征に派遣されました。遠征が決定してからは、体調に留意し練習をしたり、インターネットや本で情報を収集したり、少しでも理解を深めようと努め準備しました。フィリピンは、日本の面積の約80%で、7100位の島々からなる群島国家であること、気候は一年中温暖で雨季と乾季に分かれていることなど調べているうちに、私の心は

すでにフィリピンを訪れた気持ちになっていました。

そして、関西国際空港から飛行機で3時間程で首都マニラに到着しました。私のホストファミリーは、親しみやすく、暖かく迎えてくれ、異国にいるのを忘れてしまうほどでした。しかし、街に出た時、衝撃的光景を目の当たりにしました。私と同年齢の子供たちが、車と車の間を回ってチップを求めているのです。心が冷たくなりました。「ストリートチルドレン」という言葉は知っていましたが。情報の行間を読むだけの洞察力と、読もうとする勇氣を持つことなく、上辺だけをとりえて、知ったつもりになっていました。

「環境の違いは大きくありますが、それも現実です。良い所、悪い所全てを見て、文化や習慣の違いも理解した上で、友愛の精神を持って欲しいです。」

と、引率の先生からアドバイスをいただき、少し時間をかけて心の整理をし、日本での当たり前は、世界の当たり前ではないと、あらためて認識しました。

その時から、私は、相手の国のことを本当に理解したくて、英語で一生懸命話しかけました。テニスのこと、学校のこと。テニスは会話を円滑にしてくれ、感動を共有し、お互いの心を開放するきっかけを与えてくれました。テニスには「国境」はありませんでした。

小学1年生から始め、好きでずっと継続してきたテニス。自分の目標として、全国大会に出場し、練習を積み重ねてきた日々。今まで、自分との関わりの中にだけあったテニスが、社会との対話の手段に変わった出来事でした。

スポーツは友好親善としてとても有効であると思います。そして、そこからもう一歩進んだ時、世界の中の自分を知り、世界の中の日本を感じることでしよう。私は、世界の国々を訪れ、直接自分の五感で触れ、言葉を交わし、現状を理解するよう努力していきたいと思います。フィリピン遠征記念のTシャツに書かれた言葉が、私に勇気をくれると信じて。

「Junior Tennis Friendship」